で退院。

43. IPH に合併した胃癌の1症例

保元明彦，中村　宏，有我隆光
岡住慎一　（鴨川国保）

患者は78歳男性，3血球成分減少と脾腫を認め精査にて食道静脈瘤（CB Lm F_2 RCsign(+)）及び胃前庭小彎側にIIc 様進行癌を認めた。肝機能は ICG15 分値が21%であった以外異常なし。昭和61年2月胃全摘＋脾摘術を施行。癌は $P_0H_0N_1S_1$ で Stage II の adenocarcinoma であり，RouxρY 吻合にて再建した。術中肝生検にて肝硬変所見なく IPH との確診がなされた。術後一過性に肝性脳症症状出現したが軽快し術後3カ月で退院となった。

44. 非外傷性後腹膜血腫の1例

佐久間洋一，三好弘文，角田洋三
竹内　英世，植松武史，丹羽有一
（熊谷総合）

症例は72歳，女性。主訴は胸苦感。67歳時胆石症にて胆嚢摘出術を施行している。起床時左股に激痛あり歩行不能となった。来院時収縮期血圧60とショックを呈した。腹部全体が膨満するも筋性防御はなく，また左下肢に著明な腫大があった。腹単にては全体的にガスが多く，CT，エコーにては嚢胞様病変を認めた。出血凝固に異常なく，発症後約1カ月後開腹全摘出した。左腸骨静脈血栓以外の血管病変はみつからなかった。

45. 術後難治性腹水を伴った胃大腸異時性重複癌の1例

佐野友昭，小沢弘侑，鈴木昭一
飯野正敏　（沼津市立）

症例は38歳女性。昭和60年6月回盲部癌にて右半結腸切除術施行し以後経過観察中，昭和61年4月胃癌が見つかり胃切除しビルロート1法にて再建した。術直後より大量の腹水の貯留がみられ，内科的治療により症状の改善がみられず，貯留腹水量は1.1 l/day に及んだ。尚，軽度の肝機能障害は認めたが，手術所見では肝硬変，腹水を認めなかった。又腹水は，組成より肝床部リンパ漏と思えた。腹水濃縮還流を用い，良好な成績であった。

46. 小腸原発好酸球肉芽腫によるイレウスを呈した1例

高山　亘，花岡明宏，高村良平
（石橋病院）

症例47歳男性。昭和61年9月29日腹痛咽吐出現し来院。イレウスの診断にて入院し，小腸造影にて小腸狭窄像認められ小腸腫瘍の疑いにて10月15日手術施行した。回盲部より210cm 口側の回腸に狭窄部認められ，悪性腫瘍疑い回腸を200cm 切除した。病理学的に悪性所見認められず，好酸球肉芽腫と診断された。虫体は認められず，非寄生虫性小腸好酸球肉芽腫は非常に稀れな症例であり，若干の文献的考察とともに報告した。

47. 腹部エコーが診断の一助となったイレウスの1治験例

中市人史，坂田早苗，知元正行
石田基雄，大野　完
（宇都宮記念病院）

症例，73歳女性。6年2カ月前に胃潰瘍にて胃切除術（B-II法）施行。昭和61年10月11日上腹部痛にて入院。腹部単純X線像で異常ガス像は認められず，腹部エコーで拡張した腸管が描出された。血清及び尿中アミラーゼ値も高値を示したためイレウスを疑い10月13日開腹手術を施行。胃腸吻合部と結腸間膜の細隙より輸出脚が陥入し直接輸入脚を閉塞させた輸入脚閉塞症であり整腹術を施行した。若干の文献的考察を加え報告した。

48. 虫垂粘液のう腫の2例

村岡　実，原　壮，谷口徹志
高橋敏信　（清水厚生）

腹部腫瘤を主訴として，諸検査の結果回盲部腫瘤の診断にて，回盲部切除術，盲腸部分切除術施行した虫垂粘液のう腫の2例を経験した。詳細な病理学的検討にては2症例とも mucinous cystadenocarcinoma であった。虫垂粘液のう腫は良性と考えられがちな疾患であるが，病理学的に悪性所見の得られるものもあり，腹膜偽粘液腫のような合併症を予防するためにも，回盲部切除を中心とした治療，病理検索，術後経過観察を必要とすると思われる。

49. 肝嚢胞腺癌の1例

山田　滋，久賀克也，尾崎正彦
元山逸功　（鹿島労災）

症例は66歳女性。主訴腹部不快感及び食欲不振。超音